九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

グループ構造の基本要素とそれを通した体験についての考察

金子, 周平
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/4777961

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 13, pp.99-104, 2022-03-22. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

Bulletin of Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University
Vol. 13, pp. 99－104.

グループ構造の基本要素とそれを通した体験についての考察

金子周平　九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本稿は，グループ構造の基本要素とそれを通して生じるグループ経験の関係を整理することを目的とした考察である。まずグループの構造を構造度の低いものから高いものの順に，１）時間と空間，２）メンバーシップとグループサイズ，３）スタッフの役割，４）オリエンテーション，５）設定の５つに分けて整理した。次に，そのようなグループ構造を通して得られるグループ体験を，現実的な社会体験から共同体体験の順に１）心理的・社会的利益，２）対話：自己開示とフィードバック，３）信念と秩序，４）家族，５）群居性の人間存在の５つに分けて整理した。グループ構造の整理は，人間がどのようにグループを形成してきたか，また新たに形成しているのかという思考の参照枠となる。グループ体験の整理は，そもそも集団を形成して人間がどのように在ろうとしているか，グループで何が実現されるのかを考察する視点となる。

キーワード：グループ，構造，体験

Ⅰ　はじめに：グループ構造と体験

臨床心理学的なグループ・アプローチでは，グループを意図するグループ・リーダー等のスタッフが，様々にグループ構造を工夫することが肝要である。意図的な構造化や非構造化を行うことは，グループの目的を実現させる上で，極めて重要な作業である。グループの構造論ではしばしば,「何をどのように構造化するか」というスタッフによる意図的な設定が論じられる。しかしそれと同様に，もしくはそれ以上に，その集団に既に生じているグループ構造に気づくことが重要である。

本論では，小此木（1990）の治療構造論に倣い,「意図的に設定するものから，非意図的に与えられたもの，あるいは…両者の間に自然に形成されるものなど」までの広い構造論の視点で，グループ構造を捉える。集団が何らかの形で成立した際には，それがグループ・アプローチの形式になっていない場合でも，既に様々な構造が生じている。グループ臨床家がこのことに気づくことによって，前提として生じているグループ構造や，刻一刻と変化していくグループ構造を理解しやすくなると思われる。

グループ構造ないし設定は，Yalom & Leszcz（2020），Ohlsen, Horne, & Lawe（1988），Heron（1999）などの各理論家や実践家によって包括的な議論が行われてきたものの，上述のような視点でグループの基本的構造を捉える試みがなされることは少ない。本論の目的は，これまでに議論されてきた狭義の構造や設定を超えて，グループ構造の基本要素（Ⅱ）を整理し，そうした構造あるいは構造化と非構造化によって生じるグループ体験（Ⅲ）について論考することを目的とする。

Ⅱ　グループ構造の基本要素

グループの前提となっている非意図的な構造とグループ・アプローチの実践者が意図的に設定する構造について整理する。ここで取り扱えるものは一部分であり，特にグループ・プロセスの中で生まれる構造については，その形成過程を論じることができない。以下に，非構造化（unstructured /low-structured）と構造化（structured /high-structured）のグラデーションの順番に並べて論じていく。言い換えると，それ以上に非構造化することが困難なものから比較的非構造化が容易だと考えられるものの順序である。さらに換言すると，グループ実践者が意図しないうちに生じている可能性が高いものから意図的に設定されやすいものの順序とも言える。

１．時間と空間

グループが成立する上で時間と空間（time and space）は，それらがなければ人の集まりが生じないという意味で，グループ構造の最も基本的な要素と言えよう（e.g., 畠瀬，1977; Scheidlinger, 1982）。さらに積極的な意味を加えるならば，メンバー以外からは侵入されることのない時間と空間を築くこと（Yalom & Leszcz, 2020）によって，その時間にその場所にいるメンバーがグループになるとも言える。中でもエンカウンター・グループについては，村山（1977）らによって「文化的孤島」と表現されてきた非日常の体験を狙いとした特殊な時間と空間を設定することが重視されてきている。宿泊型か通い型の違い，さらに時間の面ではセッション時間と休憩時間，その他の時間の構造化，空間の面では部屋の種類や大きさ，テーブルや椅子，その他の配置に気を遣うこと（野島，1982）も重要である。本論では，まず集団を成立させる根本的な条件としての時間と空間を巨視的に論じるため，これらの構造の詳細については割愛する。

意図的に設定するグループ・アプローチと対比して，非意図的な時間と空間の構造の特徴を示すために，異なる二つの形態を例として示したい。一つはグループと連続線上にあると考えられるコミュニティである。広井（2009）はコミュニティの一つの捉え方の軸として時間（テーマ）コミュニティと空間（地域）コミュニティを挙げ，その二つの交差について論じている。この分類を援用すると，コミュニティやある種のグループは，テーマや時間によって成立する。それが空間にも関わってくる場合もあれば，時間やテーマの曖昧な地域コミュニティが時間の構造を持ち始めるということもある柔軟なものだと考えられる。コミュニティにおいては時間と空間の構造は比較的自由度が高く，グループではそれらがやや構造化されると考えることもできる。逆に言えば，グループの時間と空間の構造を非構造化する場合は，グループから緩やかなコミュニティへの移行を意味していると言えよう。もう一つは2019年に発生したCOVID-19の影響もあり俄かに注目されている形式であるインターネット・グループである。サイバースペースの時間や空間の境界線は曖昧で意味を持たないが，人々はそこに自発的に境

界を作り，混沌とした支離滅裂な状況にはなりにくい（Weinberg, 2001）ことが指摘される。また，人はオンラインのサービスを利用する際に，さまざまな意味や目的を伴った場所や空間に入っていると感じることが多い（Suler, 1999）。

コミュニティもインターネットスペースのいずれも，時間と空間が曖昧であるという点において，グループとグループでないものの境界層にある形態であると言える。その境界層にも，時間と空間の構造の度合いによって一定の幅があるものと考えられるだろう。いずれにしても何かがグループとして認識されるためには，少なくとも時間や空間のような感覚が必要である。

2．メンバーシップとグループサイズ

さまざまな集団の中でも，ここでは集団精神療法やグループ・カウンセリング，エンカウンター・グループ等に代表されるグループ・アプローチに関する側面のみを論じたい。上述の時間と空間の構造に並び，グループ構造の基本要素として挙げられるのがメンバーシップやメンバー構成（composition），グループサイズである。もう少し詳しく分けるならば，スタッフの一貫性がある程度保証されている限りはメンバーシップの変化を許容するオープングループとメンバーシップを固定するクローズドグループの形式の選択，義務参加と自発参加の違い，インテーク面接などを通したメンバーの選定等の構造がある。一般には，グループに適している人（Barnes, Ernst, & Hyde, 1999），グループから利益（profits）を得られる人（Ohlsen et al., 1988）を，その抱えている問題や年齢，性的指向，ジェンダー，社会経済的地位などの同質性と異質性（Yalom & Leszcz, 2020）を考慮しつつ選定することになる。一方，大学の保健管理センターのグループ等ではメンバーを選択すべきではないという考え方もある（松井，1986）。またグループサイズも目的に応じて選択され，６名から十数名のメンバー構成をスモールグループ，大人数のグループをコミュニティ・ミーティングや全体会，ラージグループなどと呼ぶ。

このようなメンバーシップの構造化は，多くの場合，グループ・リーダーやセラピスト，オーガナイザー等によって行われるが，セルフヘルプ・グループのように一人のメンバーが「仲間に会える場所を作る」ことを目的として対象者を募る（高松，2020）ことがメンバーシップの始まりとなることもある。そのため，グループを広く捉えるならば，必ずしもメンバーシップの構造化に先んじてグループ・リーダー等の役割の構造化があるわけではない。本稿では，まずそこにメンバーが集まらなければグループが成立しないという意味での最小限のグループサイズとメンバーシップがあること，そしてそのような根本的な構造を非構造化することは困難であることを指摘しておきたい。ちなみに一定のグループサイズの中にみられる下位構造としては，セラピストが問題に介入して構造化する「機能的サブ・グループ」（Agazarian, 1997/2015）を含むサブ・グループ，５～８名程度で別の５～８名を観察する金魚鉢方式（fish bowl），ペア（つがい）などがある。

3．スタッフの役割

通常は，グループ・リーダーやセラピスト，コンダクターが職場の条件や現実的な制約の影響を受けながら時間と空間，メンバーシップを決定していく。そのためグループ・リーダーやセラピストは構造の第一番目に位置付けられることが多い（e.g., Scheidlinger, 1982; Yalom & Leszcz, 2020）。あらゆるグループ・アプローチ実践において，このようなスタッフの存在は必須条件のように思われる。スタッフがセッション内の役割や仕事を意図的に少なくし，ベーシック・エンカウンター・グループやリーダレス・グループ（Rogers, 1970; 保坂・岡村，1983）を実施する場合も，そのような狙いと構造を意図するのはスタッフである。またリーダーや代表を置かないコミュニティにおいても，そのようなコミュニティを構想している実質的な中心人物がいるものである。しかし「スタッフの役割」という構造を３番目に配置したのは，集団精神療法などの各種のグループ・アプローチの構造とグループ・リーダー等の役割が設定される以前に，そこにはすでに人の集まりが生じている可能性が多いためである。コミュニティの中から，よりフォーマルで構造化されたグループが形成されること，ある人物のもとに別々に集まった人たちが，結果的に集団を形成していき，その中心人物がグループ・リーダーになる場合などである。同様のことは，個人セラピーを行っているセラピストが，後にクライエントを集合させてグループ・セラピストとなるコンバインド・セラピー（Yalom & Leszcz, 2020）の成立時にもみられる現象である。

スタッフの役割に関するより具体的な構造としては，スタッフが単独か共同（コ・セラピストなど）か，複数スタッフの場合はその選考基準（他職種，年齢，ジェンダー等）や組み合わせ，自然発生的な役割の構造化，意図的な役割分担等がある。またメンバーの支払う料金とスタッフが受け取る報酬の設定，スタッフ・ミーティングの構造化，スタッフの指向性のグループへの反映もここに含まれるだろう。

4．オリエンテーション

スタッフによってもたらされるそのグループの原理，方針，ルール，テーマ等が「オリエンテーション」には含まれる。さらに細かく述べれば，秘密保持義務やインフォームド・コンセントを重視する方針，メンバーに推奨されるまたは制限される行動，力動的立場や認知行動療法，ヒューマニスティック心理学などの理論的立場とそれに伴うスタッフの機能，より詳細には各種の技法，セッション毎あるいは一定の時間の中で設定されるテーマもオリエンテーションの具体的な形態であろう。このようなオリエンテーションの設定により，スタッフの言動は大きく規定されることになる。

また，一般に言われる非構造化（unstructured），構造化（structured）グループの形態の選択もグループのオリエンテーションによって決定づけられる。Chen & Rybak（2018）によると，非構造化グループの精神はその本質的な「自由」にあり，その自由さゆえに「曖昧さ，選択，そして責任」の感覚が伴うものである。また，メンバーがグループ促進の権限やコントロールを分有（share）するという方針にもなる。一方，構造化グループはグループ・プロセスにおける権限やコントロール，責任をリーダーが担うものであり，次に「設定」として示す狭義の構造によって特徴づけられる。

もちろんこのような意図的な構造の他に，非明示的に示されるグループの雰囲気やスタッフやメンバーなどの成員の非言語表現によってもたらされる規範（norm）があり，それは非意図的な構造としてのオリエンテーションであると考えられる。

5．設定

ここまでに述べてきた1～4の内容全般についてさらに意図的で具体的な構造化を進めていくと，それはほぼ，設定（settings）と呼ばれる作業となる。構造と設定の混同がしばしば見られることが指摘されている（北山，1990；妙木，2018）ように，設定はグループ構造の基本要素というよりは，表層的な手続きに近いものである。もちろん表層というのは比較的表層的であるという意味合いであり，その意義を軽んじる意図は全くない。

構造度の高いグループでは，セッションの時間内の詳細の設定，ペアもしくは数人ずつのサブグループの構成，課題設定，ワークやエクササイズの設定，ホームワークの設定，メンバーの役割設定，発言やそれに対するコメントやフィードバックの一人の持ち時間，話す内容の指定などをグループ・リーダーやセラピストが主導して決定していくことになる。こうした設定は，精神分析的なオリエンテーションのグループや，ベーシック・エンカウンター・グループなどの非構造化グループにはあまり多くは見られない。構造度の高いグループの詳細は，ヒューマニスティックな立場のグループの中でも，体験の枠組みを構造化したグループ（山本，1978；野島，1980；國分，1981）や課題の明確化とそれに応じた構造化を行うソーシャルスキルズ・トレーニング（Liberman, DeRisi, & Mueser, 1989）等を参照してほしい。

このような構造度の高いグループの典型的なエクササイズやワークの形式は，理論的立場を超えて，1）概念的・観念的なスキルのモデリング（デモンストレーション），2）エクササイズの詳細の内容や手続きの説明，3）小グループに分かれての実践，役割交代，4）実践直後のフィードバック，5）フィードバックを受けての再演，6）小グループでの振り返り，7）全体での振り返り（Heron, 1999）に概ね集約されよう。

Ⅲ　構造によって生じるグループ体験

構造が創られるとき，新たなグループが成立し，メンバー個々人には新たな「グループ体験」が生じる可能性がある。ここからは構造によって生じる「グループ体験」について仮説的に整理したい。

一般に，組織の中でプログラム化された構造度の高いグループや問題解決志向のグループでは，「設定」以外の構造が論じられることは少ない。これらのグループは，それが依って立つ理論を基盤として，それに基づく技法やワークが展開される社会的活動であり，具体的な目的が設定される Gesellschaft 的なグループである。よってその目的に叶った体験が狙いとされ，また論じられることになる。一方で，グループ体験は意図的な設定に対応した体験のみではない。ここでは，グループになることによる根本的な体験も含めて論じていきたい。以下は先に述べた目的志向的で組織化された集団においても生じる体験から，集団を共同体体験としての Gemeinschaft と捉えたときに浮かび上がってくるグループ体験までを触れ，その順になるように整理している。

ここでのグループ体験に関する議論は，自ずと精神分析の立場による集団精神療法の基底的想定（basic assumption）（Bion, 1961/2016）や非構造化グループに関する論考（Rogers, 1970；村山，1977；松井，1978；下田，1988）を参照して整理されることになる。

1．心理的・社会的利益

「グループが構成されると，構成されたメンバーがそのグループから満足を得ようとする…また，メンバーが所属するグループの存在によって欲求不満が生まれる（Bion, 1961/2016, p.52）」といわれるように，人はグループを通して何らかの利益を得ようとするものである。メンバーにあらかじめ提示されるグループの目的がメンバーの利益とほとんど合致するように思われる場合には，グループ前に明確な契約がなされやすい。行動面や業務上の問題を抱えた学生や被雇用者，物質乱用や依存者の処遇，児童虐待や家庭内暴力の加害者のグループ，対人援助職を目指す学生の単位認定に関わる研修などが，義務グループ（mandated groups）の例であり（Chen & Rybak, 2018），しばしば構造化グループの形態を取る。グループに参加したことの証明書や訓練の結果としての資格を得る場合には，当然「グループの中で何をするか」が言語で確認されることになるため，グループは否応なく構造化される。

ここで論じる利益は，心理的，社会的利益に限定し，生物学的利益は除外して考えることにした。生物学的には「単独でいれば捕食者に狙われやすいから，常に集団を作り，しかもより安全な中心部に位置しようとする（榎本，2001，p.120）」などの「闘争－逃避」が起こっており，生き残りという明確な利益が生じる。しかしそれはシンプルな生き残り方略を目的としたグループ編成であり，そこからそれ以上の利益や体験がもたらされるわけではないためである。

心理的・社会的利益の内容は実に様々でありここで包括的に論じることは難しい。特に心理的な利益について，有名な治療的因子の用語を借りて示すならば「情報の伝達」や「カタルシス」，「ソーシャライズされた技術の発達」等（Yalom & Leszcz, 2020）が，特別なグループ構造や設定の中で，グループ体験として生じることになると言えよう。

2．対話：自己開示とフィードバック

実際的な利益というよりも基本的な人間のニーズが満たされる体験として「対話」が挙げられる。一対一で話し合うペアや相互交流がしやすい小グループ，サブグループなどのグループ構造によって，自己開示がなされ，またフィードバックがなされていくという形で対話が進んでいく。例えばヒューマニスティックな立場の各種のグループ，Tグループ（Benne, Bradford, & Lippitt, 1964）では，自己開示とフィードバックをキーワードとして体験を繰り返す。これらのグループでは，しばしばペアやサブグループ，金魚鉢方式（fish bowl）という促進的な構造が用いられる。この立場において対話はグループにおける自己成長や気づきのための手段でもあり目的でもある。対話がグループセラピーの治療目標に向かうための手段として位置づけられる場合，対話の体験は，先の項目にある「心理的利益」に属するが，ここで取り上げる対話は，それ自体が意義のある体験であり，それだけで集団を形成する動機や目的として十分である。対話自体のもたらす強力な効果は，2000年代にはオープンダイアローグ（Seikkula & Arnkil, 2006/2016）として再注目されている。

ここまで述べてきたグループ体験は，構造化によってもたらされる体験の中でも，まだ対象化されることのできる体験である。つまりその体験「を」する／しないことができ，ある程度

は操作可能なものである。グループ構造によって何らかの心理的・社会的利益「を」得ることも手放すこともできる。また対話「を」することも控えることもできるのである。しかしこの後に論じる体験は，グループ形成そのものであるため，体験を対象化することができない。集団を形成する時に既にそこにある体験である。

3．信念と秩序

集団を形成することと，信念を共有することが密接な関係にあることを明らかに指摘したのは，Bar-Tal（1989）だろう。多くのグループ・アプローチは，ただ時間と空間を設定し，一定数のメンバーとリーダーを決定するだけで成立するわけではない。そこには意図的にも無意図的にも，信念の共有が必ずと言っていいほど行われている。Bar-Tal（1989）は，グループの信念を，規範（norm），価値，目標，イデオロギーの４つによって説明している。例えばあるグループでは，メンバーは主体的であるべきであるとか，沈黙を重視すべきであるという規範が共有されている。治療や成長に価値が置かれ，症状改善などの目標が共有されたり，あるいはグループ自体の継続が目指されたりもする。非指示的なグループでさえセラピストの行動や価値基準が知らぬ間に集団の性格を形成していることはよく見られる（松井，1978）ことである。

より明確な信念体系として，行動主義や精神分析，ヒューマニスティック心理学などの理論的立場もあり，それらはイデオロギーとしての信念を共有する集団であることを表している。また，そのグループで話されたことは外に漏らさないという秘密保持も，日常生活とは距離をとって日常を持ち込まない工夫をすることも，集団を成立させる構造が生じると同時に共有・体験される集団の価値観である。Bar-Tal によれば，そうした価値の共有により秩序やルールが生まれ，“We are a group” という Gemeinshaft としての共同体意識が生じる。こうした共同体意識においては，個人療法では生じにくい平等意識や，人間は対等であるという価値観も生じる。こうした対等性は，シェアド・リーダーシップ（下田，1988）やリーダレス・グループ（保坂・岡村，1983）として意識されることでより強力になりうるが，後述するように，元来は群居性の動物に備っている根源的感覚でもあるだろう。

4．家族

対象関係集団精神療法の立場では，しばしばグループは家族として捉えられる。メンバーがグループの中で担う役割には，家族に関するものがある。「彼らはある時は親になり，またある時は子どもになる（Ganzarain & Buchele, 1988/2000）」と指摘される通りである。グループ・セラピストやコ・セラピストは，メンバーからの父親転移と母親転移などが向けられる対象となり，メンバー同士にはしばしば罪悪感と競争心を伴う同胞転移（p.31）が生じる。

それゆえ，各メンバーの家族の中で生じてきた様々な問題が，グループの中で展開されやすくなる。Yalom & Leszcz（2020）は，グループの家族性とその中で行われる修正感情体験（Alexander & French, 1946）について「グループの設定によって修正感情体験が生じる機会は（個人セラピーと比べ）はるかに多い」と指摘する。またその理由として「セラピー・グループには，初めから様々な緊張が含まれている。それらは原初的な層に深く根ざした緊張で，きょうだい葛藤，リーダーら，つまり親たちの注目を得る競争，優位性や地位についての葛藤，性的緊張，パラタクシスな歪み，そしてメンバー間の文化や人種，ジェンダー，民族性，経済地位，社会的階級，教育，価値観の違いである」と述べている。グループには家族の様々な役割が投影され，家族の中のあらゆる問題が生じやすい特徴があり，そうであるからこそ，過去に適切に処理されなかった感情体験や心的外傷，喪失体験などが表現され，再体験によって変化していく。

集団精神療法の治療機序として，グループに生じる家族性が重要であるのみならず，さらに根本的な家族性もグループには備わっていると考えられる。対象関係集団精神療法家によるとメンバーはグループを「母親」として体験する。Scheidlinger（1982）は，グループという実体は，メンバーによってグループの規範や理想の象徴として「良い母親」と捉えられるという。彼はまた，グループのメンバーがグループ全体（group-as-a-whole）に同一化することは，子どもと母親とが排他的に結びついていた頃の葛藤のない幸福な状態を取り戻したいという密かな願いを表しているという仮説を示している（p.76）。グループは良い母親だけでなく，要求がましく，飲み込むような脅威を与え，相互性に欠ける「悪い母親」として捉えられることもある（Ganzarain, 1989/1996）。

グループメンバーとしての家族，グループ全体としての家族の体験の根底には，Scheidlinger（1982）が「投影」や「象徴」という用語ではなく，「同一化」という言葉を用いたように，メンバー個人がグループを通して家族を体験するというよりは，「メンバー個人＝グループ（家族）」であるという同一化を体験すると考えることができる。「グループの中に自ら入り込むこと，すなわち，“私”から“私たち”になることで個人のアイデンティティの一面を“放棄”する」のであり，そのような体験は結果的に「非合理的な目的にかなってしまうこともあれば，適応や成長をもたらすこともある（p.78）」のである。

5．群居性の人間存在

個人のグループへの同一化を論じた時点で，既に人間がグループとは切っても切り離せない存在であることの一端は示すことができたと思われる。ここではまた別のいくつかの視点から人間の群居性について論じたい。

Horwitz（1984）は，個人（Self）がグループの中にいることによる体験を３種類あげている。第一に，人はグループから肯定的であれ否定的であれ，何らかの応答（responses）を受け，また自らも他者に対して同じように反応（reactions）をするというようにして，映し返し（mirroring）の体験を得る。第二に，仲間との関係性（peer relatedness）である。仲間になること（partnering）で，水々しい対人関係の雰囲気を体験する。第三に，所属感（sense of belonging）である。これは Horwitz によると先に述べた Scheidlinger の同一化とほぼ同じ意味である（p.535）。集団になること自体に，人間存在の根本的な意味があることが示されていると言えよう。Horwitz（2014/2021）は近年，対象の声を聞く第一の耳，自分の声を聞く第二の耳，沈黙や言葉を超えたものを聞く第三の耳に加えて，グループ性そのものにも耳を傾けることを主張している。Horwitz は常に集団全体を見据え，また捉えようとしているといえよう。

グループ・アプローチ論以前に，人は進化論的にもグループを形成する傾向を持っている。チンパンジー，ビーリャ（ボノ

ボ），ゴリラのみならず，単独生活をするオランウータンも，そしてヒトも「緊密なコミュニケーションをとりあう集団を形成して生活している…われわれ関係」を持っている（榎本，2001, p.119）。またそれには「一つの社会システムがあり，内部に構造がある。…複雑な利害関係があるサブグループを内包する（p.120）」ものである。榎本（2001）のいう「われわれ関係」や，その論考に先んじて示されてきた伊谷（1986）の霊長類の平等起源論（交渉の平等な要素）の背景には，血縁関係，性関係，そして遊びがあると考えられている。少なくとも集団の心理・社会的な意味に注目するならば，霊長類である人間にとっても，弱いものを保護して養育すること，親和的な関係，連帯感などが，集団によって生じる基本的な体験として指摘できるだろう。

アメリカ心理学の祖である James, W. は人の群居性，そして模倣について鋭い指摘をしている。「人は群居性（gregarious）の動物であって仲間の目に留まることを好むのみならず，生得的に同種の人間に注目され好意的に見てほしいという傾向がある（James, 1890, p.146）」というように，人は生まれながらにして心理的な群居性を持つ存在だと言える。さらに「人間は他の群居性の動物と同様の模倣性を持っており，それは完全な意味において本能であり，ある知覚が生じると直ぐに行動に起こす無条件の衝動である。特に，口を開いたり，笑ったり，ある方向を見たり，走っていったりを，他の人がしているのを見ると，真似しないようにするのは難しい。ある種の暗示にかかった対象者は，指導者が目の前で何らかの動きをすれば，自動的に模倣せずにはいられない（p.580）」。

動物の瞬時の模倣は，個人を超えたより大きなものを説明するために，しばしば例示される。木村（2012）は，個々の生き物が身体を持つことによって，誰のものでもない＜生命＞がそこに入り込んできて，我々が通常使っている意味での「生命」となることを示している。木村は，このことを表すのに動物の集団行動を例に挙げ，「何百羽，あるいは何千羽という鳥が，ほとんど一挙に飛び立って，整然とした群れを作って，目的地に向かって飛んでいく…この集団全体の行動…は，どの一羽の鳥のものでもない山カッコつきの＜生命＞が集団全体を動かしている（p.20）」と説明する。下田（2011）も，学生グループでほとんど全てのメンバーが，驚くべき率直さで，それぞれの家族について語った事例と，多くのメンバーが相次いで身近な人の死について語った事例を挙げ，まるで一斉に飛ぶ方向を変える鳥のような動物行動に喩えている。

これらの考え方では，グループを個人の集合と捉えるのではなく，ひとまとまりの何かとして捉えている。下田（2011）は，どのグループにもグループが１回限りの「グループなるもの」があり，グループはその「グループなるもの」を生きようとすると表現する。坂中（2017）は，Rogers（1970）が「グループ自体が持つ促進的風土への信頼」や「グループ自身が自ら動いていく方向」と表現したことについて，それを「グループの実現傾向」という用語で捉えている。これは Bion（1961/2016）によって，グループはグループを維持するために集まるという「グループ性（groupishness）」（p.88）と表現されている。グループそれ自体がグループの目的となっているのである。木村（2012）の示し方に倣うならば，構造によって「グループ」が生じ，それを通して現れてくる＜グループなるもの／グループの実現傾向／グループ性＞と表現されるものが，グループ体験の根源と言えるであろう。そして，このような体験を治療的・成長促進的な力に活かそうとする試みがグループ・アプローチである。

Ⅳ　本研究のまとめと限界

群れは有史以前から存在してきているため，人工的なグループ構造以前からグループは存在している。私たちが今日グループ・アプローチと呼んでいるものは全て，既存のグループ構造の中で，もしくはそれとの関係の中で，新たなグループ構造をもたらすことによって作られた新たなグループといえよう。本稿で整理したグループ構造の基本要素（Ⅱ）は，もともと群れとしての我々がどのようにグループを形成しており，日々新たに形成しているのかを考える上での参照枠となりうるであろう。またそうした構造を通して生じるグループ体験（Ⅲ）についての考察は，そもそも集団になって我々がどのように在ろうとしているか，そしてグループの実現傾向についての考えを拡げる視点となるだろう。本研究で示した構造論は，比較的静的なもので，プロセスの中で動的に出現し，変化していく構造についてはほとんど論じることができなかった。つまり，グループ・プロセスの中で生じたり変化したりする構造については論じられなかった。今後は，本論を基礎として位置づけ，事例研究などを通して，グループ・プロセスにおける構造についての論考を進めていきたい。

〈付記〉

本稿の発想の多くはグループのスタッフをご一緒した下田節夫先生（幡ヶ谷カウンセリングルーム）との対話から生まれたものである。グループを通して関わってきた方々の中でも，特別に感謝したい。

文献

Agazarian, Y. M.（1997）: *Systems Centered Therapy for Groups*. New York. Guilford. 鴨澤あかね（訳）（2015）:『システム・センタード・アプローチ―機能的サブグループで“今，ここで”を探求する SCT を学ぶ―』創元社

Alexander, F., & French, T. M.（1946）: *Psychoanalytic therapy; principles and application*. Ronald Press.

Barnes, B., Ernst, S., & Hyde, K.（1999）: Growing a Group. In. *An Introduction to Groupwork: A Group-Analytic Perspective*. Palgrave Macmillan, 29-51.

Bar-Tal, D.（1989）: *Group Beliefs: A Conception for Analyzing Group Structure, Processes, and Behavior*. Springer- Verlag, New York.

Benne, K. D., Bradford, L. P., & Lippitt, R.（1964）: Designing the laboratory In Bradford, L. P. et al.（Eds）, *T-Group, Theory and Laboratory Method Innovation of Re-education*, Ney York: John Wiley & Sons.

Bion, W. R.（1961）: Experiences in Groups and Other Papers. Tavistock Publications Limited. ハフシ・メッド（監訳）（2016）:『集団の経験』金剛出版

Chen, M., & Rybak, C.（2018）: *Group Leadership Skills: Interpersonal Process in Group Counseling and Therapy*（2nd edition）. Sage Publications.

榎本知郎（2001）: 霊長類の結び付きネットワーク―「われわれ」 西田利貞（編）『ホミニゼーション（講座・生体人類学８）』京都大学学術出版会，105-148.

Ganzarain, R. C. & Buchele, B. J.（1988）: *Fugitives of Incest: A*

Perspective from Psychoanalysis and Groups. 白波瀬丈一郎（訳）(2000)：『近親姦に別れを：精神分析的集団精神療法の現場から』岩崎学術出版社
Ganzarain, R. C.（1989）: *Object Relations Group Psychotherapy: The Group as an Object, a Tool, and a Training Base*. International Universities Press. 高橋哲郎（監訳）(1996)：『対象関係集団精神療法―対象・道具・訓練の基盤としてのグループ―』岩崎学術出版社
畠瀬　稔（1977）：集団編成と場面設定　佐治守夫・水島恵一（編）『心理療法の基礎知識』有斐閣，137-138.
Heron, J.（1999）: *The Complete Facilitator's handbook*. Kogan Page Limited.
広井良典（2009）：『コミュニティを問い直す―つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書
Horwitz, L.（1984）: Presidential Address: The Self in Groups. *International Journal of Group Psychotherapy*, 34（4）, 519-540.
Horwitz, L.（2014）: *Listening with the Fourth Ear: Unconscious Dynamics in Analytic Group Psychotherapy*. Routledge. 髙橋哲郎（監修）・権　成鉉（監訳）(2021)：『第四の耳で聴く：集団精神療法における無意識のダイナミクス』木立の文庫
保坂　享・岡村達也（1983）：われわれのリーダレス・エンカウンター・グループの軌跡　東京大学教育学部心理教育相談室紀要，６，97-129.
伊谷純一郎（1986）：人間平等起源論　伊谷純一郎・田中二郎（編）『自然社会の人類学―アフリカに生きる』アカデミア出版
James, W.（1890）: *The Principles of Psychology-Volume 1*. Public Library UK（http://www.public-library.uk）.
木村　敏（2012）：『臨床哲学講義』創元社
北山　修（1990）：構造と設定―小此木の「構造」 岩崎徹也ら（編）『治療構造論』岩崎学術出版社，217-231.
國分康孝（1981）：『エンカウンター：心とこころのふれあい』誠信書房
Liberman, R. P., DeRisi, W. J., & Mueser, K. T.（1989）: *Social Skills Training for Psychiatric Patients. Pergamon Press, Inc.* 池淵恵美（監訳）(1992)：『精神障害者の生活技能訓練ガイドブック』医学書院
松井紀和（1978）：作業療法の治療構造　松井紀和（編著）『精神科作業療法の手引き―診断から治療まで―』牧野出版
松井紀和（1986）：グループアプローチ雑考　山梨大学保健管理センター業務報，３.
村山正治（1977）：エンカウンター・グループ　福村出版
野島一彦（1980）：ゲーム・エンカウンター・グループの事例研究　福岡大学人文論叢，12（2），419-454.
野島一彦（1982）：エンカウンター・グループ構成論　福岡大学人文論叢，14（1），1-32.
妙木浩之（2018）：治療構造論―古くて新しい臨床の道具　臨床心理学（［特集］治療構造論再考），18（3），257-263
Ohlsen, M. M., Horne, A. M., & Lawe, C. F.（1988）: *Group Counseling*（3 rd ed.）. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
小此木啓吾（1990）. 治療構造論序説　岩崎徹也ら（編）『治療構造論』岩崎学術出版社，1-44.
Rogers, C. R.（1970）: *Encounter Groups*. Harper & Row, Publishers, Inc. 畠瀬　稔・畠瀬直子（訳）(1982)：『エンカウンター・グループ：人間信頼の原点を求めて』創元社
坂中正義（2017）：エンカウンター・グループ　坂中正義（編著）『傾聴の心理学 PCA を学ぶ：カウンセリング／フォーカシング／エンカウンター・グループ』創元社，109-142.
Scheidlinger, S.（1982）: *Focus on Group Psychotherapy: Clinical Essays*. International Universities Press.
Seikkula, J., & Arnkil, T. E.（2006）: *Dialogical Meetings in Social Networks*. Karnac Books Ltd. 高木俊介・岡田　愛（2016）：『オープンダイアローグ』日本評論社
下田節夫（1988）：エンカウンターグループの「構造」について―「リーダーシップの分散」の実現を支えるもの　神奈川大学心理・教育研究論集，６，46-64.
下田節夫（2011）：「グループなるもの」について―エンカウンター・グループについての一つの見方　伊藤義美・高松　里・村久保雅孝（編）『パーソンセンタード・アプローチの挑戦―現代を生きるエンカウンターの実際』創元社，111-122.
Suler, J.（1999）: Cyberspace as psychological space [on-line]. Available: http://www-usr.rider.edu/~suler/psycyber/psychspace.html.（retrieved August 19, 2021）.
高松　里（2020）：改訂増補セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド：始め方・続け方・終わり方　金剛出版
Weinberg, H.（2001）: Group Process and Group Phenomena on the Internet. *International Journal of Group Psychotherapy*, 51（3）, 361-378.
Yalom, I. D., & Leszcz, M.（2020）: *The Theory and Practice of Group Psychotherapy*（6 th ed.）. Basic Books.
山本銀次（1978）：『自己開発とソフトユニット』東海大学出版会

The Fundamental Elements of a Group Structure through which Group Experiences Arise

Shuhei KANEKO
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

This article aimed to discuss the relationship between fundamental elements of group structure and the group experiences arising through them. First, the group structure was organized into five categories from an unstructured to structured order as follows: 1) time and space, 2) membership and group size, 3) staff roles, 4) orientation, and 5) settings. Second, the group experiences gained through such group structures were further organized into other five categories, in order from practical to community experiences, as follows: 1) psychological and social benefits, 2) dialogue: self-disclosure and feedback, 3) beliefs and order, 4) family, and 5) gregarious human existence. The discussion of the structures can serve as a reference frame for the speculation of how people, who are gregarious by nature, form groups, and how they form new ones. The discussion of these experiences will provide a perspective for understanding how humans originally tried to be in groups, and the actualization that occurred in these groups.

Keywords: group, structure, experiences